



神戸国際大学キリスト教センター通信
第102号 2023年11月28日

”Noblesse Oblige” (ノブレス・オブリージュ)

キリスト教センター長ミカエル 藤倉 哲哉

私が尊敬するある先輩は、リーダーの職にありながら謙虚で優しく、自分も既に高齢者でありながら電車の中でお年寄りを見かけたら席を譲る、休日などボランティア活動があれば自前の作業着に身を包んでみんなと同じく作業に参加するという人です。

その彼の座右の銘は ”noblesse oblige” (ノブレス・オブリージュ)でした。貴族の義務、高貴な責任などと訳される仏語で、社会的に高い地位の人には責任が伴うことを意味します。このような立場にある者は法律の義務がなくともそのように行動するべきであり、そうしなかった場合は処罰されずとも社会的に非難を受けると考えられています。

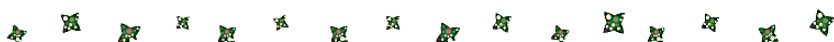
欧州の王室などは軍への入隊を伝統とするところがあり、英国でも国王はもとより二人の王子のみならず、前の女王も第2次世界大戦中に従軍していました。またノブレス・オブリージュを説明する例として、第1次世界大戦では兵卒より貴族の将校のほうが戦死する率が高かったことが挙げられます。部下を率いて指揮官として戦うことの厳しさを示していたとされますが、王族は国民のために奉仕するという姿勢、命をかけて国民に尽くすという誓いを現しています。

一方でビジネスの内容やその手法、経営者の人柄などによっては、偽善だ、罪滅ぼしだ、税金逃れだなどと誹りを免れないこともあるようですが、大富豪が慈善事業に巨額の寄付をしたり、私財を投じて社会事業の財団を設立したりするのもノブレス・オブリージュの実践のひとつといえるでしょう。広く人びとの役に立つことをするには少なからず財力が必要なので、SDGsの基盤となる企業のCSR(社会的責任)でも大企業は産業界で率先して取り組むべきとしています。

ところで、大富豪でも貴族でもない私たちもノブレス・オブリージュについて考える必要があるのでしょ。ノブレス・オブリージュの「高い地位・立場」が財産や権力に限ることではありません。より高く、より大きくなりたいと求める人は、そこに行き着くまで努力しなければならないことがあります。そして、そのプロセスこそがノブレス・オブリージュなのです。

他の人にはできなくてもある人にはできることがあります。他の人は知らなくてもある人は知っていることがあります。何かができる、何かに秀でているのであれば、優位にある、より高いところにいると言えるので、何かを提供することができるのです。「高貴な」と身構えなくても、みなさんには大学で学んでいる知識や技術、経験などがあるので「持っているもの」を惜しみなく提供してはどうでしょう。自分の利益や楽しみだけを考えるのではなく、社会に貢献する職業に能力を発揮したり、奉仕に役立てたり、誰かを喜ばしたりすることができるはずで。す。

マルコによる福音書 10:43-45 「・・・しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」



一口メモ 「クリスマス～赤と緑」

クリスマスツリーと言えば「樅(もみ)の木」と「赤い玉」を連想しますが、ツリーは後の世の習俗なので聖書には出てきません。他に杉などの常緑樹を使うこともあり、いずれも Ever Green 枯れない緑を表わし、欧米の家庭などではクリスマスツリーに生の木を遣うことも少なくありません。また「赤い玉」は命を象徴していると言われますが、一説では知恵の実(アダムリンゴ)とも…? そして頂点の星はイエスの誕生を知らせた「きら星」を表わすもので、これはちゃんと聖書に書いてあります。(マタイによる福音書:2章1節)